書き抜き読書ノート 1009	2011 年 7 月 2 日

貝塚茂樹著「論語Ⅰ」中公クラシックス、中央公論社 2002 年 12 月 10 日刊を読む

仁

1．では、仁とは何であろうか。以下、仁をめぐる弟子との対話を中心に見ることとするが、まず注目すべきは、樊遅との問答である。そこで孔子は、仁について問うた樊遅に対して、「人を愛す」(顔淵篇)と返答しており、それに従うと、仁は愛情ということになる。

2．確かに仁は愛情にかかわるものであろうが、その説明だけでは十分ではないであろう。同じく仁をたずねた仲弓に対する孔子の答には、次のようにある。

門を出でては大賓を見るが如くし、民を使うには大祭に承うるが如くす。己れの欲せざるところを人に施す勿かれ。(顔淵篇)

3．ここにいう大賓は重要な客人、大祭は重要な祭祀のこと。つまり、仁とは、客人を鄭重に迎え、人民を慎重に使うべきことであり、さらに自分の望まないことを他人にしないことだというのである。重要なのは、仁とは、他人を思いやる心であり、まごころ、すなわち恕をもつことだという点である。したがって、まごころをもつことができれば、「唯仁者能く人を好し、能く人を悪む」(里仁篇)というように、真の意味で、人を愛し憎むことも可能となるのである。

4．このように、孔子の説く仁については、その内側のはたらきを重視すれば、そこには「愛の仁」とでも呼ぶべき、主観的な仁が存在することが認められる。が、実はその一方において、外側の作用に着目すると、客観的な仁が存在することが知られ、それを一言でいえば、「徳の仁」と表現できるのである。「徳の仁」に関しては、やはり仁について質問した顔淵に対する返答中に見ることができる。

己れに克ちて礼に復るを仁と為す。一日己れに克ちて礼に復れば、天下仁に帰す。仁を為すは己れに由る、而して人に由らんや。(顔淵篇)

5．孔子は、自己にうちかって礼の規則にたちかえることが仁であり、一日でもそれが実現できたら、天下の人々がこの仁徳になびくと説くのである。これに拠れば、仁の実現には、自己の内面の充実のみならず、外面的な社会規範としての礼が不可欠だということがわかり、そこでは単なる愛情でなく、仁の客観性が求められていることは明らかであろう。そしておそらく孔子にとっては、この「徳の仁」を完成することが究極の目的であったと考えられるのである。

6．ところで、『論語』には、仁と同様に、孝という徳が強調されていることはいうまでもない。その仁と孝との関係については、門人である有若が「孝悌はそれ仁を為すの本なるか」(学而篇)

のように、仁を達成するには、親への孝行、兄への悌順が根本であると述べたのが、最も的を射た解説だと思われる。つまり、仁を達成するには、まず第一歩として身近な家庭内における孝という徳を修めなければならぬというのである。

P14 〜 15

[コメント]

孔子が精神修養の面で最終的に目指していた「仁」についての論語を引用してのわかりやすい説明は有難い。

－ 2011 年 7 月 2 日林　明夫記－